

はじめに

学長 河野 公俊

少子高齢化社会の進展により、大学が如何にその質と存在意義を確保していくかは大きな課題である。そして、社会からは大学の本来の目的は何か、どうあるべきなのかを常に問われていると感じている。

大学の歴史を調べてみると、ユニバーシティとしての大学は11～12世紀に始まったとされるが、高等教育機関としては紀元前にもあったようである。中世においては、その役割は学習による神学、法学、医学や哲学の専門家養成が大きな使命であった。近代19世紀になるとリベラルアーツと自然科学が加わり、徐々に今日の大学の原型が形作られ、学問の自由を標榜し、研究に基づき、真理と知識の獲得が目的となった。明治政府は、この欧州型の高等教育システムを参考に我が国の教育の近代化を進めた。最初の最高学府は、ドイツ医学を手本とした医学校としてはじまり、その後、総合大学となり現在に至っているようである。

第2次世界大戦後の学制改革により学校教育法が施行され、大学設置基準に従って新制大学が設置されてきた。同時期にアメリカをモデルに「会員の自主的努力と相互的援助によってわが国における大学の質的向上を図る」ために設立された大学基準協会は、会員大学の大学評価を行ってきた。その間、1991年の改革で大学設置基準の大幅な緩和が図られ、社会からは、大学教育の質の確保についての疑問が投げかけられるようになったが、2002年の改正学校教育法により大学等の高等教育機関は認証評価機関による評価を7年以内の周期で受けることが義務づけられることとなった。したがって、この自主点検・評価報告書の作成は避けては通れない大学の責務でもある。

本学は医療系ユニバーシティとして産業医学・産業保健研究を基盤に、専門家を養成するという大学本来の役割を果たしてきた。さらに、これからの本学の将来性は、学内組織体の有機的連携を基盤にサイエンスの基礎体力をつけることはもとより、いかに卒業生の社会活動を支援し、社会に貢献するかにもかかっていると考える。この自己点検・評価報告書は前回の評価結果を踏まえ、その後の社会情勢や時代の変化もとらえ、社会に貢献するだけでなく卒業生ひいては国民に信頼される大学を目指し、そして本学の設置目的と理念に沿う形で、作成された。作成にご尽力いただいた関係各位に御礼と感謝を申し上げます。

最後に、是非、本学の発展のために、学外の関連する各方面からの御批判をお願いしたいと思います。

平成25年3月